

總數四百五十點のうちから予の選び出したのは僅にこれ丈である。自分から曰ふのも變なものだが、予は今假りに自分の水彩畫を此間に置いても格別の遜色はあるまいと信ずる。思想感情等の點から見れば殊に彼等の作物の多くを凌駕し得るか、やうに考へる。否日本人の水彩畫其物が全體に於て決して歐米人のそれに劣つて居ないと認めるのである。總括的に曰へば日本人の水彩畫が概して汚くよごれて發色が悪いのに比べて、西人は色が奇麗に保たれて垢抜けて居ると云ふやうな違ひはあらう。併しながら彼等の手際がよく色の奇麗な場合には多く自然の忠實な觀察と描寫とを犠牲にして習套に甘んじて居るのであるから(無調除外はあるが)秤はかりにかければ同じやうなことになる。其思想感情の方から觀察すると却つて西洋人の方に頭腦おたまの古い後れた人が多いのである。これは恰度現今の日本文學と西洋文學との一般の比較に就いても同じことであるらしい。早く天狗になりすまして困るが、此點に就いて日本の新人は相當の誇りを有つて居て然る可きである。

『サロンなどでは水彩、パステルの類は廊下に懸けられる』と云ふことを唯一の證據として、水彩畫なるものを油畫から幾段下つたもの、やうに斷じてしまふ者が之れまで日本の或洋畫家のうちにあつたが、それは極めて愚蒙なことである。大體佛蘭西の春のサロンの陳列の如きは決して理想的のものではない。其廊下に懸かるのだからどうで下らないものだと云ふことは謂れないことである。また假りに西洋に於て水彩畫が油畫程に重

きをなさぬとしても、それを直ちに日本へ當てはめなければならぬと云ふ理由はない。祖先から親みの深い水繪具に長じて、將來日本人の水彩畫が西洋に於けるよりも、より多く重きをなすことがあるとしても、それは少しも差支へのないことである。

(十月十六日巴里の寓にて)

パレット評判記 (一) エス、キタヤマ

他人のパレットを紹介すると云ふことは随分興味の深いことだ、多少研究の一端にもならうかと思ふ、毎號の餘白を利用して専門家、秀才の嫌ひなく、可及的細かく紹介することとせう。

赤城泰舒氏のパレット 四十一年の秋神田の

竹見屋から十五錢で求めたさうで、可成新らしくない二ツ折パレットだ、外部の所々に損傷があつて鐵葉が光つて見える、六寸五分に三寸、十八仕切を十二仕切に直した嫌にガタ／＼する品物だ一寸拜借して手に持つて、一番右の端からホワイト、レモンエロー、カドミウムエロー、バーミリオン、ローマズダー、コバルト、オルトラマリン、ビリヂアン、と云ふ配列で、此外に寫生の都合でベネチアンレット、コバルトバイオレット、等も使うさうだ、繪具は主にニュートンでホワイトやレモンエローは佛國の安物でも使はれないことはないとのことだ。筆は大抵の場合には夏毛の極大羽根軸一本でヤツつける。パレットの内部の塗料が剥れた時は奇麗に剝してしまつてエナメルを三四度も乾かして塗れば元の通りになるさうだ。次は誰?